

兄は昭和十年、二歳の私に長男役を託して飛行予科練習生を志願した。当時は、家に後継者が居なければ受験できなかったという。

日中戦争では海南島に駐在。昭和十六年に始まった太平洋戦争では、冒頭の真珠湾攻撃の艦上爆撃機の操縦員として参加。両親には誇らしい息子であった。その後南方へ転戦し、戦況悪化のなか、昭和十八年六月に二十四歳の若さでソロモン群島に散った。

過日、私が書店先で偶然「真珠湾攻撃隊、隊員列伝」の中に兄の名前を見つけ、本を出版元に注文したことから次々と縫れた糸が解け、関係者のお力添えで、近く靖国神社や、土浦の予科練記念館へ遺影や遺品を奉納する運びとなった。

兄の遺品や遺書は、一括して別保管していたが、改めて総点検し、当時二十代前半の青年が心に抱いていた、家族や国を想う純粋な気持ちがヒシヒシと伝わって、思わず胸が熱くなった。いま我々は、戦争の無い平和な国で暮らし、当然のように思っているが、この現実には沢山の命の上に築かれたものだというのを、日本人として深く自覚すべきだと改めて思う。

遺品の中に、一歳の女兒を抱いた夫婦の写真



らないこともあり、父への手紙には再三、入籍を急いでいたが、現地部隊内での許可手続きにも時間を要したらしく、目的を達しないまま戦死、最大の心残りだっただろうと思う。私方に入籍しなかった義姉と姪は、その後再婚され、七十年におよぶ戦後の混乱と変革の中で徐々に縁が遠くなり、消息は途絶えた。この親子もいわば戦争という嵐の中で人生が大きく変わった被害者と言える。

今回、兄への弔問、再開が現実味を帯びてくるなかで私は「或いは？」と僅かな望みを抱いて二人の消息追及に力を注いだ。約二か月後、関係する役所や寺院、いろいろな方を尋ねたが、残念ながら二人とも既に彼岸へ旅

がある。この写真は昭和十七年、真珠湾攻撃に成功した後の休暇で、兄が帰阪したときに写したもので、たった一度しか機会がなかった親子写真である。兄は、戦闘員として自分の生命がどうなる判

立っていることが判明した。靖国の一柱として祀られている兄だが、大阪には墓もある。今回の消息探しで頂いた二人の写真や遺品をここに収め、七十二年ぶりに兄の両腕で抱き締めて貰うことにしようと思う。

(この記事は平成二十六年、靖国神社の求めに応じて、ご遺族が奉納をしたものである。)